

創刊号

No. 1

2006年11月15日

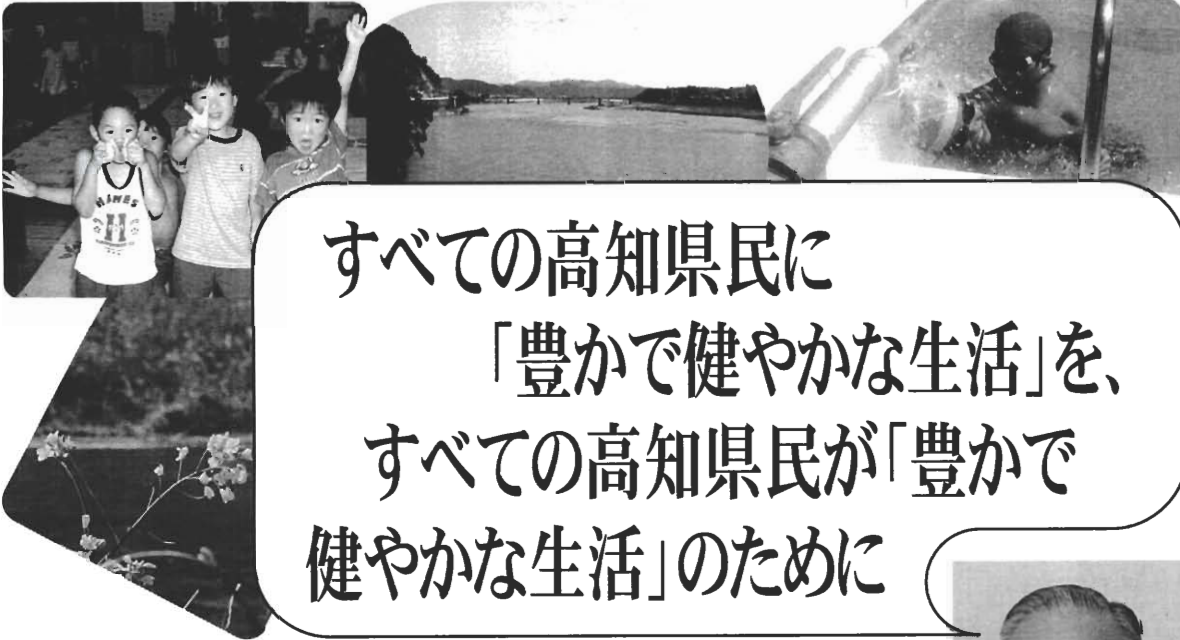
こわち自治研

発行

高知県自治研究センター

780-0862
高知県高知市鷹匠町2-5-47
TEL (088) 824-0151
FAX (088) 820-0062

編集者 折田 晃



すべての高知県民に 「豊かで健やかな生活」を、 すべての高知県民が「豊かで 健やかな生活」のために

「まちづくり」のエネルギー源として



高知県自治研究センター
理事長 青山 英康

「まちづくり」

三〇年以上もの歴史を持ちながら、二〇年近くもの間の休眠状態にあった「高知県自治研究センター」が力強く再開されたことを全ての県民の皆様と共に喜び申し上げます。

自治研活動とは、地域住民の日常生活に幅広く関わりを持つ自治体労働者が日常業務の中で直面した問題や悩みを直接住民の皆様と語り合い、研究者の協力を得て科学的に解決を図るための極めて地道ですが、非常に大切な活動です。

公衆衛生学を専門にしている関係で、若かりし頃から岡山県自治研究センターの活動に参加し、今日も副理事長の重責を担っている者として、今回の高知県自治研究センターの再開に参

加させていただいたことは非常に光栄に感じています。残り少ない任期の中で、ただにお役に立ち得るの不安ですが再起に燃える数多くの県民の皆様の御支援と御叱正を賜りながら一杯の努力をさせていただくことをお約束して御挨拶とさせていただきます。

最も恵まれない自治体・高知県

「地方分権時代を迎えた。」と言われながら「聖域なき行財政改革」を掲げた小泉政権から安倍政権へと中央政治情勢も大きな転換期を迎え、国際的に他に例を見ることの出来ない急速な少子・高齢社会の中で、全国的に最も恵まれない自治体となつている高知県の実態を直視すれば、自治研活動は生涯に亘つての豊かで健やか家庭とまちづくりのためのエネルギー源となることが期待できます。高知県で生まれ、高知県に住み、高知県で天寿を全うしたいと全ての県民が思える高知県にならなければならないと思えます。

「行き過ぎた改革」で 公的サービスが低下

小泉政権によって強行された「行き過ぎた改革」によって貧しい自治体での公的サービスは大幅に切り捨てられました。国民が期待した「補助金の無駄使い削減と規制緩和」の行財政改革はいまだ道半ばといった状況です。

今こそ住民参加の政策策定の声と力量を発揮すべき時期が到来したと云うべきです。急速な市町村合併の中で過疎地や無情な自立を求める福祉行政の中で高齢者や障がい者に対する公的サービスは大幅に切り捨てられる危険性が高まっています。

すべての県民が 参加する運動を

このような現状認識のもとで、高知県自治研究センターは当面の研究課題の対象を、拡大し続けている社会的弱者としての「過疎地」と「高齢者・障がい者」にシフトすることを常総会で確認しました。そのため全ての県民の皆様が参加し、運動を盛り上げることの出来る体制づくりにとりにくんで参りたいと考えています。

山あいの町に笑顔が咲いた

まち徳島県上勝町に学ぶ

二〇〇六年度第一回セミナー・講演(要旨)

高知県自治研究センターは、八月一九日に高知市において、センター再建後はじめての事業となる二〇〇六年度第一回セミナー「コミュニティビジネスから地域再生を考える―葉っぱを宝に変えたまち徳島県上勝町の取り組みに学ぶ―」を約二〇〇名が参加する中、開催しました。

第一回セミナーでは、第一部としてセンターの畦地和也理事から、二〇〇六年度の基礎研究である「高齢者が行うコミュニティビジネスがもたらす福祉的效果に関する調査研究」のプレゼンテーションを行い、第二部で「株式会社

上勝町

上勝町は耕地がほとんどないような山のなかにあって、面積の八六%を山が占めています。人口は二〇〇〇人で、四国で最も人口が少ない町です。高齢化比率は四七・一五と、少子高齢化の時代のなかの最先端を走っています。

でも寝たぎりの人が二人しかいません。一人当たりの医療費について合併直前に徳島県が五五市町村あった時にデータを出してみると、高齢化比率順位と一人当たりの医療費順位というのは並ぶのだが、上勝町だけは違っていました。上勝町の一人当たりの医療費が二六万円、一番多い山のなかが四六万円でその差が二〇万円、二〇〇〇人で四億円違います。

葉っぱを仕事に

いりどり」代表取締役副社長の横石知二さんから「人は誰でも主役になれる―山あいの町に笑顔が咲いた」と題する講演を受けました。

横石さんの講演は、上勝町のすばらしい実践の報告にとどまらず、高知の地域づくりに対する熱いメッセージも込められたお話で、参加者に感銘を与えてくれました。

そこで、今回はこの横石さんの講演要旨を掲載させていただきます。なお、詳細の講演内容は、現在センター事務局で第一回セミナーの報告書として作成中です。

こへ行ったらパツと取れるけど、東京駅に立ってすき一〇〇本取ってこいと言われたら、これは大変やなと。

これはいけるぞ、よしやるぞと思つて帰ってきて声を掛けてみました。「葉っぱを金に換えるんは狸か狐のおとぎ話や。仕事はもつと真面目にしないさい」などといわれながらも、四人のお婆さんを口説いてスタートしました。

そしたら全然売れませぬ。アカンのかなと思つて諦めかけとつた時に、ひよっこ料理人が来て「これは、わしは使わん」と言われて、「あらっ、現場へ行って見たことがないな、現場へ行って



世界中探したって

にやつていけない時代が来ています。昔は素材が七割、活かす力が三割。今は素材が三割、活かす力が七割要るんです。

コミュニティビジネスをやるうと思つたら、絶対に仕組みがなければうまく行かないです。

役場の防災無線の電波を使って送信を考え出し、高齢者専用パソコンを開発するなど、FAXとパソコンでいりどりと生産者をつなぐネットワークをつくりました。

人は自分の出番があることと評価されることが大事です。一生懸命やつたら、自分にそれが返ってくるというところが大事なんです。だから私が何を考えたかと言つと、毎日の実績表と順位を付けてあげたんです。人の順位は見えない、自分の順位を見ます。頑張つたら順番が上がるといふのは嬉しいんです。それよりも



平均年齢70歳。94歳でも木に登る!

と思わせるのが三〇%です。ああしんどいなと思うか、ちよつと頑張つてみようかという、この気の部分というのが今のこの人間社会のなかで、一番大きいと思います。

私は「腰に印籠つとり」とずっと言ってきました。自分の地域、自分がやっていふことに自信と誇りを持つって印籠を出せなアカン。私はここがちやうんや。私はここを見てほしい。私はここがほんとに自分のえいとこやというのを、この印籠、葵のご紋を腰につつとりよと。

お婆ちゃんが多いんがどうしていかんですか。パツクにも集めさせたり、詰めたり、木登りさせたり、坂駆け上げらしたりしてみてくださ。その若い女の子と競争させたら絶対お婆ちゃんにかなひませんよ。お婆さんだつて、ええとこ

また、ある九四歳のお婆ちゃんも四世代で住むことになつて、もう涙流しながら、こんな人生送れることが私はほんとに幸せだということをおつしやつていました。上勝に生まれて良かったということをおつしやつてくれる人がたくさん増えてきました。

小さくてもキラツと輝くまちを

徳島や高知は人口が八〇万人しかおりません。大きいんがいろいろでしょう。小さいなかでも、ほんとに自分の出番があつてキラツと輝くことがあれば、どつちが幸せか分かりませんよ。自分が社会とつながつていふ、自分の出番がある、そして少しでも何か役に立てるといふ気持ちで地域の人が持つような形ができていくことが、一番今の時代に必要なんではないかと思

います。ですからやつぱり地域の

人は誰でも主役になれるー

葉っぱを宝に変えたま



(株)いろどり 副社長 横石知二さん

主要産業のミカンが壊滅した上勝町を「妻物」で救った立役者。終始「攻め」の仕組づくりとおぼあちゃんたちとのコミュニケーションで、山間の町に最先端産業を創出。

【いろどり】とは？

料理に添える妻物の全国シェア8割を誇り、年間2億5千万円を売るまでに成長した、徳島県の上勝町・山間部の地域資源活用型産業。防災無線活用やFAXや高齢者用パソコンなどの試みや、高齢者の自立・健康、高収入が注目を集めている。

私は徳島市で生まれ今も毎日通勤をしています。前の町の町長が、農協に対して誰か外から入れんかという話を立案し、それで白羽の矢が立つて、大学を出てからお世話になるようになったんですが、最初は苦勞の連続でした。この葉っぱの商売をどうして考えたか。あるとき大阪の寿司屋で御飯を食べた時に、隣に三人の女性がいて、「つまもの」のモミジをグラスに浮かべよう」とか言いながら葉っぱのことで大喜びをしてました。あれっと思いました。こんなもん、うちの裏山にいっぱいあるのに、なんでこんなものに感動するんかなと。それから、この環境の違いを活かしたらえいんだということに気が付きました。うちの裏山ですすき一〇〇本取ってこいといったら、そ

こんな楽しい仕事ないですよ

てみよう」ということで、二年間料亭通いをして、何センチから何センチのものが出るとか、どんな器を使っているかというのをずっと勉強してきました。そして、これが五円、一〇円が一〇〇円、二〇〇円、三〇〇円、四〇〇円、五〇〇円という値段が付いてきてだんだん商売になっていきました。全国をずーっと回って行って、パンフレットを持って商売をしていきました。何千軒という店をまわって行ってだんだん産業として成長してきたという事です。

何が大切な

価値を売る、地域の魅力を売っていくんですよというのを、私はずーっと言ってきました。場面、価値情報、仕組み。このことによつて田舎は蘇ります。これが分からなかつたら絶対に蘇らないと言うか、落ち込んでいく一方です。葉っぱは五%だと、私は言います。葉っぱを売るんだつたら全国どこでもできる。葉っぱでない部分のこの四つが九五%を占めます。高知も徳島も一次産業の県です。一次産業はもう今は普通にやっつたんでは、絶対



と嬉しいことがある。あの人だけには負けとうないという人がおるんです。隣に絶対に負けとうない。このライバル心がありますから、みんなが高齢者専用パソコンを使うようにもなりまして。昔と今で一番違うところは、自分で考えるようになったということ。六〇ではじめてお婆さんが、今八〇半ばになってます。今の方がはるかに、信じられないぐらい能力が高いです。頭を鍛える訓練が要るんです。これやってみたら面白いと自分で考えられるようになったら、田舎はものすごく面白くなるんです。そして、上勝独自のやり方が情報で気を育てるということです。気を高めてやる気を育てるのが七〇%。データをさせて、なるほど

家族が仲良くなってきた

いろどり事業をやつて何が良かったか。家族の仲がごつついよくなってきました。日曜日や土曜日に、息子さんが帰ってきている家庭では、お爺ちゃん、お婆ちゃんがおらん時にちよつと寄つてきて、「横石さん、ありがと」と言うてくれます。どうしてですかと言うたら、「やつぱり親が老人ホームや福祉施設へ入つてそれを私らが面倒見に行かないかんのと違つて、こんなふう元気なパソコンも使うたり、テレビにも出してもうたり、いろいろ元気でこうやつてやりゆうのを見よつたら、私も帰つてこようと思う。親のようになりたいと思う。」と。



ほんとに小さいながらも上勝町の取り組みですけれども、是非皆さん徳島、高知手を合わして、小さいながらもキラッと輝くようなお隣同士で何かもつと田舎から元気を発信していくような形を取れていくように頑張つていきませんか。まちづくりも商店街活性化も一緒です。うちのような町が二つ、三つと出てきて、地域の輝きが全国に発信できるような形ができればいいなと思つております。

(文責・事務局)

障がい者の要望に応える 地域福祉を求めて

自立支援法実態調査研究がスタート

高知県自治研究センターは、二〇〇六年度の研究として、基礎研究の位置付けで「高齢者が行うコミュニケーションビジネスがもたらす福祉的效果に関する研究」を、一般研究として「障害者自立支援法施行後の実態調査研究」を行うべく、作業を進めてきています。今回は、このうち「自立支援法施行後の実態調査研究」について報告します。

問題の所在と仮説

自立支援法は、財政面からみた持続可能性を一面的に追求した制度改革であるがために、認定制度や費用負担増によるサービス利用の抑制により、利用者の生活困難を増幅させているのではないかと同時に、同じ動機から、事業者の報酬を切り下げたことにより、事業の継続に支障が生じているのではないかと。すなわち、障がい福祉サービスの利用者として提供者の両者からみて実態に合わない認定、サービス提供、費用負担、報酬のシステム設定により、利用者や事業者からみた制度不信を増幅させ、まさにそのような本質的な側面から「持続可能性」が損なわれつつあるのではないかとという仮説のもと、研究を行う。

この基本方向に基づき、二回の研究会における討議の中で、当事者・家族の方と事業者それぞれにお願いする「アンケート調査」の内容を決定しています。また、調査方法については基本的な施設・事業者、事業者用アンケートへの協力と利用者への働きかけを依頼していくことを確認し、一月中旬のアンケート配布、一二月中の回収というスケジュールで作業を進めていくことにしています。

研究事項

一、高知県において、自立支援法施行のもので、当事者の生活がどう変わり何を感じているのか、事業者がどのような対応を

行っているのかということに焦点を当てた実態調査を行う。

研究事項

二、市町村のサービス供給体制や地域生活支援事業も含めた各自治体対策の実情などについても調査する。

三、その中で、当事者ニーズに定める行政・事業者・市民の支援策のあり方など今後の課題と望まれる政策方向を明らかにする。

座長

田中きよむ (高知女子大学社会学部教授)

研究員

朝比奈亜希子 (高知市健康づくり課) 小田 順一 (土佐市保健福祉課) 瀧本 星児 (いの町福祉課) 高村 境次 (NPO法人まあるいのちのちやれんじど応援団)

事務局

折田 晃一 (自治研究センター)

高知県自治研究センター2006年度 役員体制

理事長	青山 英康 (高知女子大学学長)	理事	中谷 達美 (高知県交通労働組合執行委員長)
副理事長	筒井 早智子 (元高知労働局雇用均等室長)	理事	中平 正幸 (高知市職員労働組合執行委員長)
副理事長	浜窪 章 (自治労高知県本部執行委員長)	理事	山崎 秀一 (高知県職員労働組合執行委員長)
常務理事	折田 晃一 (自治労高知県本部副執行委員長)	理事	山村 一正 (高知県木協建材協同組合代表理事)
理事	畦地 和也 (黒潮町企画振興課企画振興係長)	監事	近藤 啓子 (高知県市町村共済組合)
理事	小川 豊香 (自治労高知県本部保育部長)	監事	武森 正憲 (土佐市職員)
理事	川田 勲 (高知大学農学部教授)	事務局長	折田 晃一 (自治労高知県本部)
理事	川崎 敬子 (NPO法人「まあるいこころのちやれんじど」応援団)	事務局次長	金子 伸 (自治労高知県本部)
理事	清水 康文 (RKC高知放送常務取締役)	事務局員	森下 乃文 (自治労高知県本部)